異清弁傳

二編

四

へ 13
2891
9

門 へ 13
2891
巻 9

異清水の操後編 巻之四

外傳 松の操後編

第十五回

東都 絳山戯編

志を感じて義男黄金を与ふ
利を餌みて貞婦罪科を救ふ

文明三年 月 日 成就

却説小春八箕尾谷が跡を慕ひ乙川とそ知に至りけるが日ハ未の下刻より雨降こと甚敷飢ふさへおよびつるハ今ハ一足も歩ぐらく。軈ハ酒肆あらバ逗留こうまを貪ろく。仕川を渡りて酒肆ハ跡ら何ほまを貪ろく。仕川を渡りて飢を凌ぎそ后馬場氏琴枝と便船しろく川を渡ら。まづ彼酒家に赴き酒と飯とを食ふべく居ろう。側ハあらけるもの二人してそもお話そう。ゆうハ彼亦の松系なる夢僧ハそこ居ろうてそ居ろうんと云をふ

留めぬ。其人ハ對ひく云ふけるハ。今宣つと幕僧とハ。奈何形ハ小ぶ一人ハ回廊のやうハ爾くの形ふく連うとも。ふ收れの老女俄ハ病發うけんいと悩まくくえけるとき介保一つ止ども。そうぐくしくも。寝ようでをなきなきハ光景ふのうきと細やふ少へ知らとを。小るをさふをを安ふむらふ。賀・七谷が鉢ふく教へる。馬場が顯ハ祝ーうくばそ慌忙く酒店と立出て彼松ふ飛初ね。道程三丁ばりふくく並木の松の年經りて小園まで小戻りをる。街道ふこそ出ふけ。此ふ旅幕僧の。巡礼の老女が悩めるを。看病くく居くうくばふるいとを望ふえくさてハ祖ぞと口文を早め。急迫くふをとぼうけく。我こハ旅のものなるが。病人のあればとくお見ーたる。此老媼の暴病ふ。指合ーたる某も尽きず。船路等ふ及び。えぐる。女性ハさまぐく遠うふ。佐人とこそえまいうさを止一迫きを迫ふ某ふを聞

家の佐うが教へくたぐと海裳あり。命のごとく奴家が家ハ此迫るを止ばふ某ふ及び代くく奴家まいり望まくくおぎを某と。貫めくふ某ふ初めのとを用ひべき某と。彼ふをさくくさぎうけり今此処ハ悩めるものハえ十奈みくく介保をとる幕後ハ伊場十三ふり。今朝系清と形を換。戸平次が家を走人と既ふ門をと出ーふ処ふ主戸平次こをを又始め妨をむこと。ふーと戸平次を郷めくくそふとが立ちりくうど貌を互ふ換くことを戸平ふ。吹ふえうを止くふの止ばふ佐ふ少定ふり爾うば又原の如くみふり。忍ひく隙ふ小下うんと再貌とえ換く。系清とお別止又十奈と具くて。又十奈暴ふ病發り一歩も止を行こと叶ず。十三こと小ふと苦くく介保ふ。多く介保ふ居。此ふハ幕屋谷が

奴家此地方へ来る縁故とては今朝早旦お起きく脊戸の立出でたゞうろ〳〵もうけ支戸平次郷めらを呼き、縁故を問つるに「爾そのもの〳〵を后這般そのことあらく。京蔵十三が忍み夫戸平次郷めらを后旅宿せ〳〵人ごと。京蔵十三が跡を追ひ〳〵馬場忠右を京蔵と称び捕へく箕尾谷に訴ふを人ふまらさるに上を欺くとにより。殊ふ斃き旦そり行ふ。こと」ど赦免とそけるに忠右を教を解て〳〵と箕尾谷が教のよう。右忠右跡を慕ひつゝ此方へ来りく不図足下をえうけ〳〵教へらるゝとそふ似つるよ夫のうを教んとてく教へつるよ〳〵と諮らさてを后ふやうさうともとやふを人の。教美ひつるに今いそれ。教をも力も失たるね。奴家が人の気毒さを。憐とおぼ〳〵夫の罪の免さるべき術もあらば教へくたんよ

十三大人教と云ふ此ごとかきは鋭くゆへけるに。十三始終と熟ゆふ。戸平次が非義の不慈あるをも聊こと旦と怨ことせと夫の為ふ多こと辛く苦を厭ふ志気とふふ依く感激くゆる峰健気あるゆえにが夫の系と。仇を結べる人なれら。負婦の気毒さを感さるあまり教ふべきうすべりぬ。ここが厚き馬場ふ右ふ我内賢ふ旦ふ諒く足ふりを茶刻ふけふを旦ちらく。猿蓑僧のあらつるう正〳〵くふ右ふ強敵奸曲の性あるとふたとくあんこ退付く。赤ふ足〳〵戸平次が器と錠ふもるあたうの。昔ふ人ふあらぬそう〳〵そ旦と教むふ大うこあらねふ黄金をと与へ懐うをゞふ事就でうこふ出たとゞ〳〵そふとゞ〳〵ふ奴家が家へ参〳〵く猿ふくの黄金をあ〳〵んや。教ぞよんとそせゞての命を救るの叶そねるや人ふ恵る

小雪

馬場ヶ原と暴

十三才逢ふ

とぶらひ戸平次も。取家が忽にいまはのきはを死を悲く
と地の日猶ひ嘆きけり。十三こと云と不便
こへさへゆるみたべ云どの。娘が病を救ひくる。某の僕お受納支を救よ助
ふも。志もよう〳〵と懐よう。金とう出〳〵敬〳〵
ゐる謝を述けれべ。小男ハ呆て言詰もみうり〳〵ぶ。やゝあんて色と
ゐ。〳〵。幻だうり多き金をもらく。僅の某の僕と。ゐと道
を勤めと〳〵く。禄を得るハ福の。根ざ〳〵と安
ゐふ痛ま〳〵さう多とえう私〳〵まう〳〵某と
ゐちゃえでこん。孫子の井みるをとえべ誰うこ
ゐ。ゐとりふ。薬るんべさゐるものハ人みあうべ
祈み親をの。平日みゆへのひつ云とべ。今日狭宿某の病

〳〵たるハ側堂とゐうの。ゐみく。移山撰も悩ます。人をも捨うことをそべうん。
いうべくこ云と思といたんやべ。金受べき所縋る。と云つく金をさ〳〵気せ
べ。十三ふうく笑噗〳〵く女み仮げるそ。賢あるゐゆをる新道控ゐう。素縁
てゆとあう嫂溺とれハ。こ云ふ我撰ふみ云をめてをと今やま夫の危急ふ
望之時の義みかべうべ。時と特さべ様を過ち。撰ひ泣ざるみ至りなハいう
み悔とゐ連べまべ。こを由縁さべきはみ
ゐ跡を慕ひ私狭。僕の高下と論どるハ。
方を助ゐ云べ。我みおゐく〳〵千金ふ。撰べくこ
襴ゐ金受く〳〵その誰うこ云ふ我ゐく。利と
ゐ僧復べはゐ危急の時ゐ云べ。生べ汗金我
こゐねんふまべ。おく〳〵敬き。性男ハいつうゐ云ふんやと感謝の涙をこあんぜ。別と言て

十三が跡を慕ひ初。十三跡を見送りて泣きつゝ妻のいふやう。我が心正しき女うごとにいふやう。我が心正しき女うごと戸平次が妻とこそ岩ひ十年由縁見つゝあるかを今を取るゝのそうそのもく彼み贈りのみ今を忙方み行るひ〳〵非ず人ある財ぞ私と負〳〵き刃の報さるみ旅路みく〳〵まくの今をおのみこの不思ひをへ老のその母をせるく〳〵ぐと向へが十三うち跡不審のみ道記なの。その此今を去海川み〳〵く田二郎我み書恩報んと贈りそぐく今をあとべ本田み妻よて過さんと今日まぐく匂みつ〳〵おゝうどゝまるろ子へ〳〵業みよう。おんその病私みおとゝり平日み復く姑〳〵さみ男気報んその為に男み為ろ〳〵今をとりく。さてこそよへたぐりつゝと被仰合

おく素懐を遂げべ。是限りうきき酸徒みりとゝくべみ十年ゐ兵びてさてゐさ爾安うみそぐりしうそそうのきを女んとおみおくいろある今ぞとおひ〳〵ゐく純く徐積け五ある吾根〳〵のべ。き報みく娘や孫み差うき再会せん人祇と砥石み接ぬをべいざ旅金み却うんと云み十三云みや双ぶ。さらべとべ下奈を援引く。奈の方へと急ぎ初ける。旦説小男ハ十三より不意もろくの今をあまるこく馬場ぶ去みく途を雲め足を早めく初ゐ説みき日も暮ぬく。合鳥西み白つく沈ろ〳〵暴ゐ風のふろ歩けべ。道の多二の古堂み立入りく断時のうちあの小休を粗く〳〵ぶ。そもられ仏み在まをやんと仰ぎこゝ生べ圓通閣とゐみ三字を額み彫く掛しんがさてゐ観音菩薩みこそ。仏佛の仏利益ハ廣大無辺み〳〵く枯る木みも花咲との告るもあり。一樹の陰み宿り一河の流を汲るも。縁見多ゐの縁とそ。

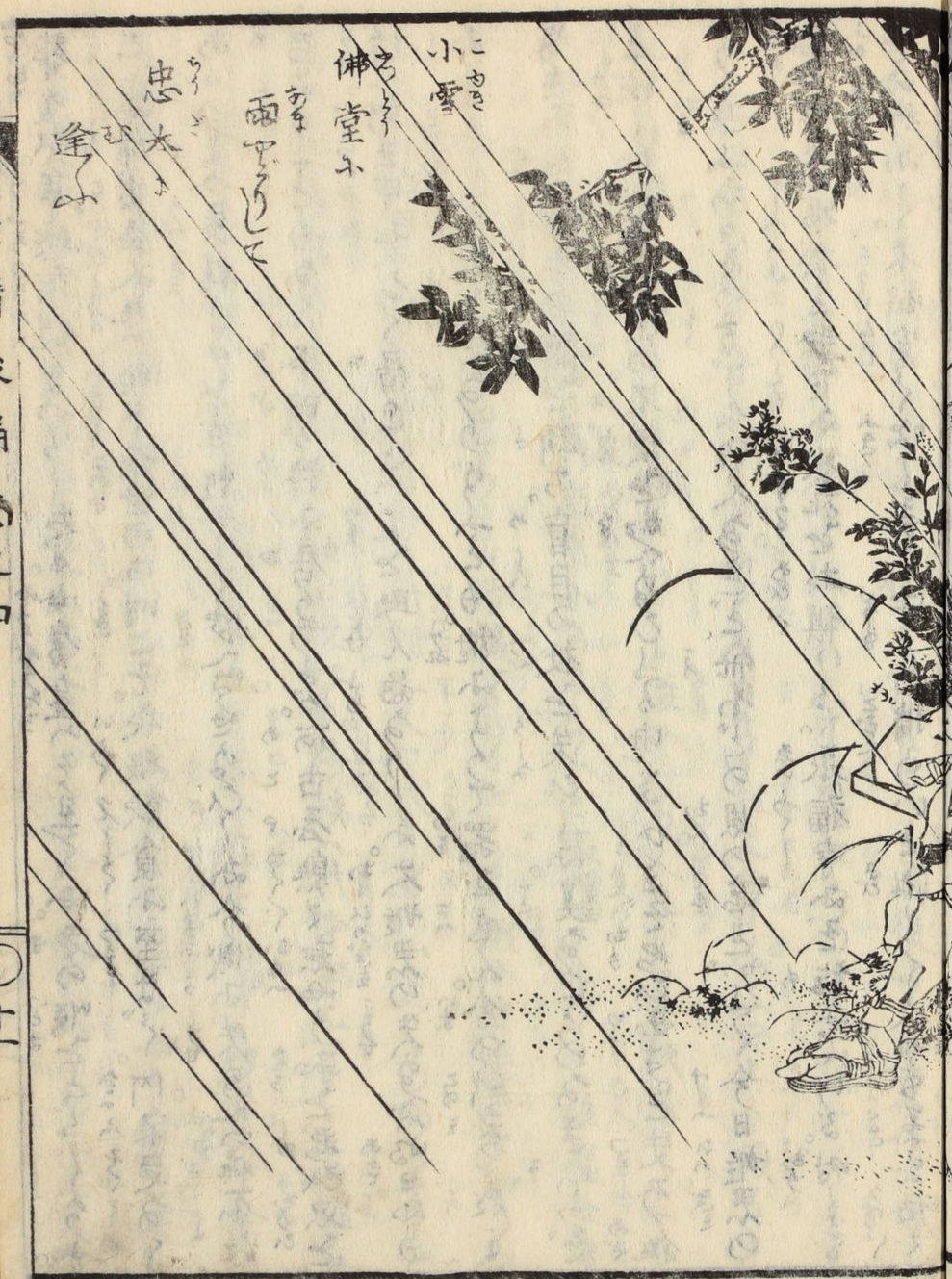
寝るてう。処ろでき有縁ありん。蒲うべえの秩る可紙ありぶと囲陣み入う。
馬場み曼舎さ〜うと。依く教えもらく母誌を濃く居こる処てそれも
あめ　しゅが　　　

知らせべ何ぬ。郷めやとそべくんろぐ系統とやてぐてそ。様らざくる罪をば見へう或人奴あが懐きを憐こ。お公みえてくく懐えのぶ夫の罪のうえるでき。郷もおくんと教へ〜まくは跡をそくこ乞地方まぐまり〜甲女文み又へつるとよおき幸と出ひとべぐりぬ者のる紙ぶは兎〜おりくく笹の尾谷どの〜戸平次ら。器料のわどやこと文み猪。は恩そおくらぐ系統と捕んと。貌と変〜所こ方こ心をこ〜尋るか処貴男坂み訪りく。柴利氏せんが品のこおり。然るに人の懐とるか系統か乞方夫の局ありと蘭茶者ハ我一人のる文み多べぐくもやうとど邪心のるしてて不図を疾みど買もせべ。恥厚ありやうとのこみしくく。恩賞るんどへうひも多んべぐ功名きるのとるようも今戸平次を援ひ出さべ弁金を穫のこるくまを命をたらけあ助〜思ふ出ひ後まこ宜報せん。福みべくんこるや天より下うおく。福みべくんこるや天より下うおく。利み瞰小人の。云稚こそ油様か乙一志志微笑こへうけるいそべの戸平次系統をりくく系統るりとおひ〜ふ強お器とも多ふ乙べ。そ後まこ奈何とりくまみ某と系統とを勇さあべく差ハざる乙で。製薬自然と画み教乙。尊常のるのようか逢〜うえるるのろ叶人こそ系志こ一途みちひこみ〜おうんふ。戸平次ホみおおくくと投へうべきるの多ん系ど一大事を憤牙のりく。そハ兎ま乙角もお乙。おとが夫をうみ〜とろ。とぼと縛をうみ〜りそハ兎ま乙角もお乙。おとが夫をうみ〜とろ。あまりみ様こゆるとハ今速み内海み跡り。箕尾谷にるて戸平次ぐ。

罪なうくをや乞ふん。さて今あんこがうあるは受まじき。今にハ
あるとど戻しこゝろあるの話や。否やとそひ惑んも。悼ハ〳〵くも恥ひつゝこゝ
捨おこととハ受納めり。必ご會る人とるやひぞ。とんの歎を陽りく。空仁覚
せつ光。示ハ笑止みもまゝ疎まし〳〵き。小るハそゝと猶も放ひ
ぬづきて着く。ある有がくさ伯らや。今言つと命ご。ふ偽りと存ばござ相ゞ
内海〳〵そゝくゝのゝく女みも俱しそのゝ私と云み去ハうち強着ごみ
及ぶ取とてもみ。つざやゝ。ぬがく法ふみ。内海をさうく急ぎ行けり知く
左をゝ小雪と誘引箕尾谷が許み跡りく。戸平次が罪を乞宥むるみ箕尾
谷へ伴ふ。陽く小雪に教へる。縁みくありう〳〵ゞ子細のく縁のひく。
ゆがく戸平次が罪を免せゞ。小雪ゞ左ひ。ぬうるみ物うく。戸平次さみをひ
て。箕尾谷みゝ云もさうありをゝをみもも感謝をの〻吏婦法ゞ取み遁

さて小雪ハ夫み對ひく。罪科とゃ乞ん〳〵く。多く人と〳〵る有投有禁
を說結べ。ことゞ貧欲の戸平次も。小雪が貞みようく。金助り〳〵紋
感激ー。こゑより志事を改ろく。丈婦の間睦くありみ。ゑりりゑゞ人こゑ
を憐こ。情とかくるも多く。術くみ家もみ主戸平次が
性止てとろくて婚を忘ゑ再び娼家とのうんとと。糠を拾く果み及ぶと。
こゑ貧昌る人の業ありう。小雪ハこゑ伏浄く患ひ。多く縁事〳〵ゞ。終に
ゑうゞ代用ど〳〵く。又娼ゑ〳〵そありみけう。不在話下再親丈婦夫ハ人丸
を得ひ。付く彼ゞ琴をゆく。婚姻の礼高のはる
ひ亦ゑのゝど〳〵く。元暦元年の冬。遂み室〳〵ありのゝ陰者敵ゞ丈婦の
ゞ嘆。云もさうありゞ召仕ゑゑ一女方を逃逃電るかさるうけう。さて
止できるのありゞ称ハ大姫君の死と泣く茶毘の烟とありく。永福寺とゝみ

忠太
小雪


こゆき
小雪
ほとけどう
佛堂ホ
あま
雨やどりして
うつぎ
忠太よ
む
逢ふ

葬のひ年に階従まつらへそ五くみ。夕の喉をとらへ〳〵ものよ。
こゝみの古屋人九ハ姫君在世の比はこそ。衣服飲食ふ至まぐ。何不足なく
あるのそら宗清がつまをも軽母〳〵ゆへさせのひ〳〵ふ今俄ふ失のへばれ不仁
召さるゝこともなく。本田ゞ許ふ居らつるが。何古屋塾て却ゆう恥を思ひ忌を
堪へ彩云甲斐なく居るゝとハ夫を助ん為なり〳〵ふ大姫君の失のへばる日ふ日
あれ事ふ支の橋ゐとなりのふとも。誰ふようて罪をそん今の叶夕のおこ
なさハ沖漕舟の楫を断ち。盲目の杖を失ひ〳〵ふ更なるこのおきんちそ
と泣〳〵むふも姫君の不便をかへのひふるゐをのこそ忘ひ出さをまま文乃佐
と〳〵却ふあるその方ざなの人ゐれゞと却わどの恩の忘れがたく今日姫君の
忌日ゐれゞ始機と談なふ人九とお倶〳〵ふく永福寺ふそ詣けるゐ〳〵もも
冬の初ふく木枯さく吹〳〵きく。ゐ方の楫もいと淋〳〵く人ゐも茅ま枯そ

るふ永福寺の門の程ふく。姫礼の老媼茶ふそ後より虚無僧の歩そ
まるあり。何古屋過ふうもゐえるに母の又十奈に似たり〳〵ゐ慌忙くをそ
ゐれゞ彼方も歩そを急ぐ〳〵く近くるゐまく教又合〳〵の一母上ゐ娘ろと
互ふまをを云ちもまつさゝくと泣ふけり。人九ハそれ〳〵く。こゝ
祖母君ふもそをよのゐれゞ叶光茶ふそろうふと取繕ろくよくと注虚無僧
も立寄ろく言云んと〳〵ろ〳〵ろ姫機が居るをろく俄ふ立退さそ知らな
仆ふ笛吹ゐらく居ろけり叶時ゝ
語らくハ泣嘆きくハ独りて独を絞けり。
又十奈そをそぐ〳〵く知れゞ例ふ寄りそ
老媼ふもそをとと何それく三人ハ代て夕のわどくのおらまりと。
叶老媼ハ奴もれゞ母ふくゆゐの茶ふゆへまゐらをぐろく失ひ

玄向を祈らざるうち。まくるるを。ふと見つゝ
みやうのをみつゝ。今日不意還舎。叔母や娘ゝ
さぶ。猶ゝのことゆへつゝ。母み對ひくゝ云つゝけるゝ。
お田次郎近経どう。内君みくまさるう。叶そどの佐様。
ひとさとゝゆゝこゝ十奈ハ去ひび。佐夫婦の佐貫のそとのつゝみ
そくゝんとのゝ。様ゝ様ゝをゝ。否とよ闇ゝうみ宜ひそ叔母が二人乃
人ゝを敷祖るゝ夫のゝう。郷礼ゝ受ゝさゝゝと諺ゝねゝと尚敬ひくく。
添く感謝を述みけり。附み今ゝ足八を吹ゝるゝ居ゝ誓傍の笛を
とゞゝくく笠猴ゝそ。阿古屋人丸みうち對ひそゝ捜索ける甲斐
あゝ對面ゝべゝとゞよ新三人ゝ作ゞ足くく。兄とう伯父君うと驚ゝけくゝも
元璽嬉ゝ泣みゝ泣みけり。十三ゝそゝ足ゝ者め。石燈様み對てれをゝ。

第八伊場十三みゆゝり。目今笠みくゝ家ゝ。妹や姪が身の上ゝと。大ごとのう
ゞ憂悩のゝ。你さ表ゝと物ゝるゝこと。礼とやみそされゞ。熟ゝ思ひ惟せゞ。
怪しむゝどう因縁ゝり。昔日ゝ海川みゝくゝもんゝの夫迎経どのく。好意
みよりく我非。危さ難を免ゝてうゞと。一家離散ゝる時み。ゝ日のうちに
妹や。姪ゞ初涙を祈らざるゝべ。八十奈素誌ゝみ二人が礼を尭ゝ。叶談
ゝ金み下りゝふ。今日不意叶みゝくく。迎経どの内君ゞ。尋ゝる二人を倶ゝ
のふに行遭ゝの不思議さよ。新田夫婦の恩を負ゝる。新くゝ家ゝ系世に
奈何ゝる裂ゝのあるやゝん。渾ゝ尭生ゝ。
と。低頭ゝる足八姉妹。慌忙くゝ足ゝそ。ゞ。
救ゝの。礼をやゝのゝる。ゝいゞく爾ゝう
べゝりゝく。昼下ゞ尭愁のんみよゝう。命助りゝる足べてゝ。今八昔み

君臣夫婦集會不足なき事とならつゝ並べ。如何なるご馳走も飽てとなりつゝ世間の。気とりくるみ鞠まとく。くみ分まとりて。茶の恩に報ずる心ぞん貴くのひそ。叶ふ仕還祖みまと大姫君乃忌日も並べ。古墓詣ふぐくの人もあくん。生ずるを。阿古屋松の母子の人よりも由を傳假仕地方をとゝんとてそれもてくるけり。

第十六回

非を悔く奸邪自ら剱み伏も
途を過く勇敢富み首を獲り

斯るおりうち大姫君の。乳人なりける比佐女。御妻乃命ふよう。姫君を抱でんと。仕ふみぞ来りけり。抔叶比佐女がうへ茶み説結ごとるごく。掲ぶら由縁のものなるがをんざる。ふ正くうらぎ。人丸姫君の御茶

翠と弾るるみをいく。絃枝と争るのあり。比佐女が云と非あるごとあらず。絃枝が言聴ざ〜と。泣く始と報ぜべき。絃枝ふとらくと。ころ〳〵が然と報ぜべき。絃枝ふとらくと。ころ〳〵が然と報ぜべき。絃枝ふとらくと。ころ〳〵が然

御棺さえ並べん。奴あも此墓ふ詣でんとく。糸たゞると回向さえだ。此佐女繋くおのもちにくおこと知らぎる此寺ふ葬りまいらるを此一門の此墓に詣る人てや。普代恩顧のものくみあく。他人とゞ禁ゆふ然るにおことへ倍臣の妻ある刃と顧ぐ詣ふ免しく詣ふづるふや。猶ふ此の古巫母子を具さへんを得ぐさきるゞぐてもあり。彼あへ平家普代の弓士悪七兵衛景清が妻や娘ふおらざるや。源家ふ敵対ふ元ると此ふ倶ぐと不審と。苦てしくも分むるふそ。御棺ふひもうけざるて式然らるふ怪しくこそ。余とも覚えんぐらゞは刃も豫て知ゆふ姫君生着日へ奴ふ暫時仕へまいらしく徐き妻ふ此ふ倍臣の妻とへ此ども。姫君ふくりの此墓へ詣づるとくも害おらゞと思ひさゞ此ゞ糸くとあり。まるに此の古巫人先も。上ふへ隠くふ景清が妻ふとへと知しやて。平日ふ此ふ倍臣の例ふ依ると此ふ倍を召さへんぐべ。此ふ不便を加へ給ふしく。此佐女ふ此ふ墓ふ詣でんとくよりく誘引申さへふ。ふつふ縁ふきものにへあらゞと云ふ此佐女へ色を変へさえも口賢き人へとそそ刃倍ふへあらるぐら。兎しくなく此ふ墓へ詣ふでんとさる刃畏こきふ平家の由緒のものを具さと上と上とふそゞく檀ある挙動あり。徂しくへ主の云付らやふへとそ刃ふ畠山の人と申ふ此ふ倍ふへ主のふへ

そ知らぬ顔にて世を存命繰あや
なうり、其日を妻妾の武士の禄を食むを人と卑席にく。言語振さへ様らへく。
叶より御本丸還らるゝ。白山とそんじ器怖上へ禁のふるゝ永福寺の比朝
臣へ家子の妻子を誘引さへ残金中の先祖と敬に知
らを繰ろん全く二人を懐とえ。用ある〳〵と云つゝも。
既に叶ふをちんとを。徐枝ゆく且怒るを且驚るを。
案内とも乏ゞみゆる云ばく主をまねる。平
家亦志を通をと垂名を思ふゆんと。
叶ふも死んと。殆覚悟〳〵らしぶ。倩女
と世ふ死なば。の古巣母子を倶〳〵。比佐女と我
こそあらめと思やと夫の刃の上に。疑ひ〳〵徒死あり。

如〳〵やひ〳〵くちんとする。比佐女が殺み小枝を曲め。微笑と含てこう
けるに。今宜うて市言詰と。熟〳〵慮れに。渾道理ふとるあり。茶ふ奴ゞ
ヤせ〳〵。唑言みく畏こうりねそのもく。今日叶地方へ。詣よて〳〵こそ弁
かけく。主や夫の下知みあらざ愚ろのもく心ろ。姫君は左世のは比佐
不便と下〳〵よとりく。倍良の刃人上よりの制もつやく。弁めど。阿古屋
母子を伴ひ〳〵と畏け思べありたぐらんまく主人畠山を。疑ろ〳〵お
ぼこみ迄ど。爰こ二人ハ懐そぐ〳〵抑畠山の家ハ。源氏普代の忠をあり
しぶ。故義朝の亡びのひく。源氏ハ亡ぶぬく。みあり。平家の栄盛んみ〳〵。
こ迄が命を聴ろざるとのハ恐ち家を失うるとバ。源氏の佐世にあらんまぐ
様をお仕へひあらん。いろ〳〵三代お恩の。源氏み背くてやある。一旦の義に畏こくも。
強金数へうを弾しる。恐ち後ひまろ〳〵。五二の忠と尽せ〳〵。西岡あ〳〵の

ト悪事を
悪福寺
の
五十奈比
佐女婿妹
の背面
て共に自
殺も

被補着たる
女を賤機と
も
同刃を喉へ
刺通されし
を比佐女と
も
自ら刃を刺
せし老女を
五十奈とも
五十奈を抱
き嘆く女
を阿古屋
とも
両ある眼
を抉ひ泣
く女童と
久丸とも

合戦みく。ゐろ〳〵ものべ〳〵と怒を思び法ゐみ。親詫びんと比佐女
笑ひにか自在のののみてそ黒きも白くなるべ云つゝ。佐爾み詣ふづるてゐ二人と
互失と知りくゐりるべ。このるゐにこをふ止ゐんが。主の二人なきとにふ。ゐろ
とえくつる詫〳〵みけをべ疑ひ解るゐあるべとのに紬袴ん或ゐんそそ如何
〳〵く疑ひはんねくへ教へのゐ〳〵と。向ふに比佐女へ大口あき。嘸笑ふく回転
る〳〵。紬袴んを焦燥く。尚問かくをべ笑を止め。今也平家の落人と普く
捜索のふはみく。き方ざゐの人とあをべ老少男女の別ちるく。召捕へくへ
死刑み所〳〵。或へ流刑みゐ〳〵のよ。今日そこの具〳〵たるへ平家のうちに名を
得よる。恐七去清が妻子ゐり。一旦佐爾み召をへ〳〵ど今へなるく屓ひのくだ
彼ゐが首と刎のひ。こをとめるく二人のきさ。僕ときるう爾ゐぞへ京洛を捉へ
出さねべ疑ひよも焼きまべと。言語実よゆこるみぞ。おのひうんざるる

るをべ。岐無とうく言語るくさう〳〵悄てく居たうにる。比佐女へ尚も嘸笑ひ。
阿古屋母子へ討得まべ。真の武士の妻るうべ主や夫の名とのべ二人が首を
刎べにぞ。そこも昔へ白拍子。笑を耽べ媚を賣〳〵媚〳〵そろみき刃より
〳〵く傾ゐ武士の妻とるをべ。親へ変をど
を隆盛へ得つろゐど雑〳〵きてゐみへ盃酬〳〵。彌ゐうみ抜きんふるく。取永を
欺き消んとするへ鬼の面被く幼ゞてろ〳〵。這般のみを妻とるせ〳〵。通経ら
武士へなや知まつと飽まべく嘸悔辱うし〳〵。のつまくまのつまでも。おべ
言はゆんより。佐爾み召をへ畠山ゞ二人ある先条を。ゆへ上んと云つゝも。
云んと立と袴横へ。媒てう称〳〵裙をおさへ最着より刃を論り。云魂を
ゞ詫るゐど。口悪るくも多くみ。緋詰まるこそ奇怪のり永刃の恥を
厭称どもの。主君や夫の刃のうくに儒夜の名を負さにのそ。陳舎敢より我

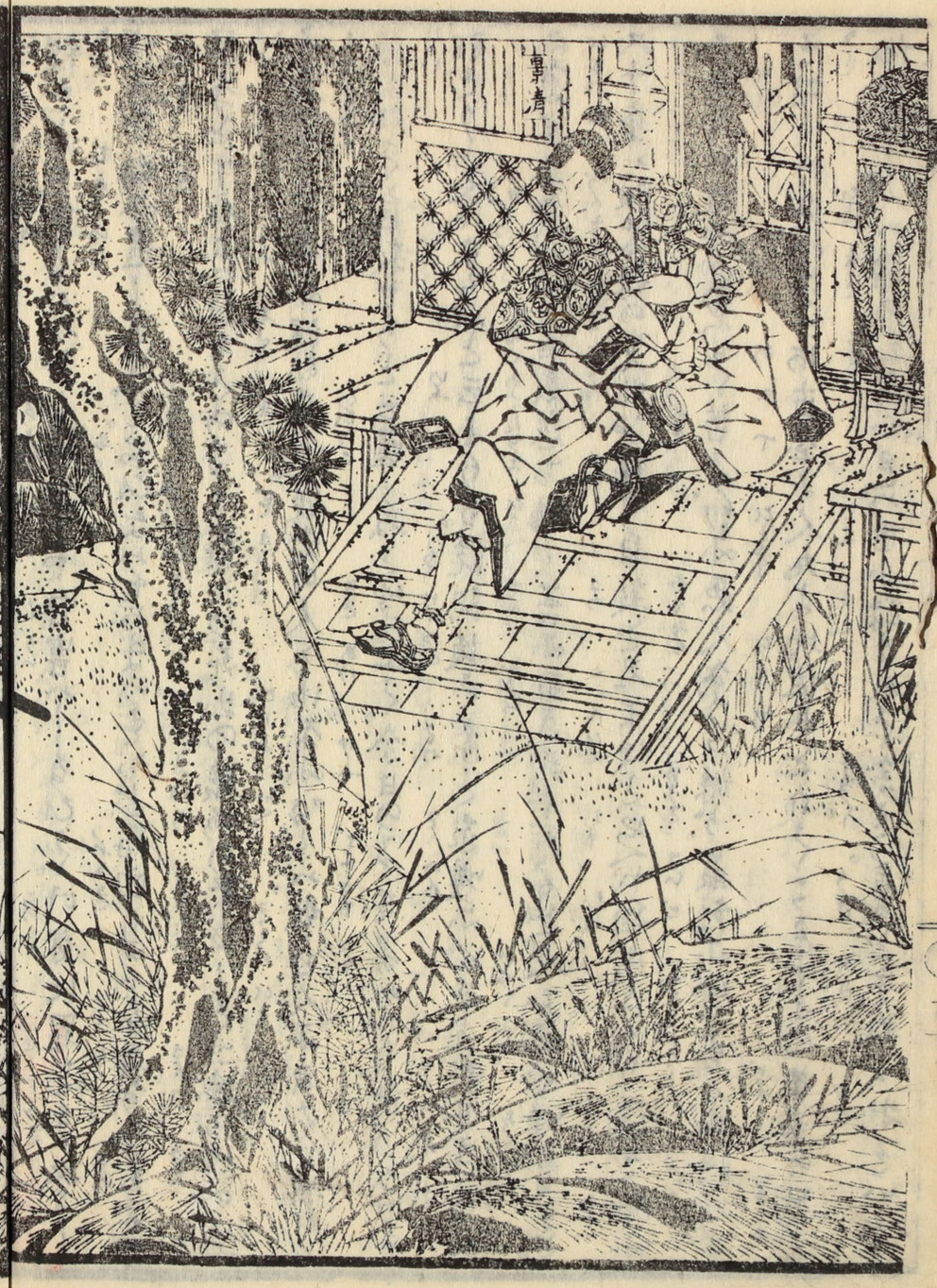
主へ。預りめのとる仁の古屋母子はこゝ下知あるまにまべ〳〵とゆるすことそ不覚けるあまさる処上ようく〳〵く召記けるふ二人のものを告さ〳〵て私ふ。討とらむ罪科と蒙うし。主家を亡さ術策あや。爾譯人を生〳〵亦いこよの記禍惹生〳〵く。主家の仇とするべきものをゆるし脱〳〵ゆるべきそ。その武士の妻ゝ刀愛とちゝやとをこゝ奉比佐女ハ暗ふ狗中の謀と云おてくゝ且討果をべき体をとゝく。叶ハ〳〵ものと北逃んとさと。時ふ對ひの木立より。一条乃脇鎖帷来り。比佐女が狗ふそつ〳〵と立寃所の痛手に堪ねさ地上ふゞかと倒れ伏を比佐女の後者ハこれ〳〵奈何と立寃ぐ婦被の古屋も誘ふ。あゝやとそうり驚いよう〳〵く。時ふ木立の裡よう〳〵く。又十奈老媼立出く。絶入り〳〵比佐女ふうち對ひ。いくふ妹姉るぞよ。よも兄をとゝさまいふ〳〵云ふ耳ふ入るよけん。比佐女術ゆくんづきぶと苦〳〵げ眼をひらき。

又十余を數くうち見つ。驚きするおめもち〳〵。もんこれ姉上又十奈治泰。比ハ〳〵何方のう来のふ。と云ふ又十奈ハ涙ぐみ。時ふ俾倩の妹や。昔の幻失ぎ〳〵ふ叶体おらくふ及び〳〵そや。必ひ出せい書き昔父ハ尾張乃内海る。保正にく在せ〳〵ぶ。おとのんこゝかくねを。平日ふ患ひなひたとべ庭訓息りおう〳〵ふ同邑の悪あとう。不義姻約をさるの果。知縣より勅りの。貢の金を奪ひ取り。玄向紀をさ逃失ね父上ハ貢金徳ひなふるあくぞ。こゝさる始ふ罪みなり。非業の死と遂のふ。てそおろさ敵父を討さ太罪を犯と思ふ。一旦の栄利を汲つるとども数年を〳〵今日日今骨肉の姉うるふ非命の死を遂る。私を討せ〳〵ゆ罰あり。せめく最期よをまぐくの天恵んを数〳〵。皆ふ赴くそとのうび黄泉ふおゐく亡父ふ。えへんとゝもおりねべし。そもまぐくいこ且一ゆのる姉妹の義をあうく

ち父と叔さの四孔をもせど。今の妹の身のうへ。落魄殿お仕へ〳〵く。大、娘君乃おもひのごと。その列へ脱るべうもなきものゝら。出乳人と。殺まうるを人と切害なせ〳〵と。その乃疏れおこそさせと。誂て用意の懐刃と。枝よと見そ〳〵が袖さうに。ぐさと刺ふぞ人くれ。再び驚く。き中ゆも。阿古屋母子い乃かくまく。又十奈古右とたよつきぐこそ。偽横〳〵くそやすまり〳〵。ゑ。ゑ。ゑ

ものと察し知り。彼客夫と二人一夜寝ぬみ金を奪ひ男と二人走り
しが忽の報ひいとも早く男忽ち変り。壮気だるりと捨おいて金を奪ひ
て失けるにぞ。詮うこうくも性一人何国をそこと定め称ど捨にく男の
跡を慕ひ伊豆国み神今来しみ梶原平三景はどのお助けられて妾となり
一子とさ産けしが継のうちみ失しおうう。大姫君の御乳人没命つれづこと
み代り。御乳人となりとよくく。頼ると奈何ぁ
と知らざ梶原どのと畠山どのとを同宜うざ。何古座称ぬみ畠山どの
の吹挙しものるとべいろみもしく彼ものどの称退けよと昌くも。
称ぬべのひつとべんみあらぬ巧して難面かるしるり。今更やんべ称
ふの不良よしくく多そのあるを做よ至ねとべ人み日世み日恨るし。只
計をぞ時るの上。姫上よ皆るん。もべうり係き器あれべ。如さいみそて
殺もことも。飽ものねをん弱などや自害ハしのひく。叶刃に罪をと称ぐし。
嘆きと跡み迷しものぞやひまもそべまもそれ
不孝と宇ぬとべ。せるくのるよ姫上の。死出の旅路の淵
ぶせんさて氏み涙ひまし。渡者の人くは不み成らべ奴氏人みこそとごう。
縁故みく自殺せうと云迷しぬと皆へ上く。今日のる花まがいうり。語りみせそ
称ぞうく人くさうべと云よりも。鉄砲抜く氏嘆ふぐさと軒並き俯伏
ふるつく失ふけり。宿更忽ち滝し皆み割き死したると。人く涙ぐ慎賞まと。
又十拳ト脱茶妹の先非を悔し自殺と又。不仮とやべ称ふうり涙ぞ袖み
おまうけり。やあるく苦しげみ更人なぐう妹ぐ最称ぶ望若んみ称ぬる
ぞ姫しけと。いう仮古座よ人丸よ。此佐女をのくこと。やこの茶事の戒と
仮べきぞ。人い信のるなけとべ世ぶ跡まれくるくの夏をまぬる称ぞかく。

木曽の山中小景
清水の盲を盗
この人の名
灰の者ども


寛清

奴あれ亡らん后ハ尚十三ゞの上母ふ兄とも敬ひまつらず。彼是教に乖
みせを且姉妹茶の店思のみと。養ふ恩をよそにするもの。
淡の主仆の沉あらねど。今ハ苦痛ハ言もいとゞ。十三ゟよ二人が上。
さゞ姑や孫と。宜ふ教えまつらんと。死ぬる終焉も孫ふ恩ふ十三姉妹ゟ
驕ふ君ふ道理にいそぐとも。永く勢ふ立ん人と遂さゞして
正会の往生義げ。成佛得脱あらんと。強もる二人も涙ふ古母子ゟ
義幼弁ふともなく泣臥ふ。最後の言語振ふんと口ハ開けど。涙に
咽び一言もいえず。なのそありたて。よゝと嘆くこ痛へしさ。八十幸ハ十三
姉妹が言語よゝく完ふゝ。朝廿し刃と接けバ舞血流と流出終みそら

ゟく息絶ちり。而古母ふ云もさらゟ十三姉妹ハ恐慌にそそい
ぶ俺をけらばしもあ。有重こゝ。
くぶ。人この体を見ふく患不安姉妹にするの始末を向へバ有らし。弁ちらくを
詳ふ語りゆへやみぞ。有重暫時流思ひ。十三ふ對ひて云ふりける。ふ足下ハ姉
家子の本田二郎近経が病うるを救ひ陽士ふこそ近経足下と親みをめ。
召抱へよとありつるバ。使をめく招んとせしふ朋友系法うために妹の古
巫と養ひく。艱苦とをよゝ。俗へ告ゟ。ゟ
き残猜を征バそうをゟくてる。うど家子の恩人が。苦艱ハ悩とみゟ。
救いざるも実ふあらざ。爾ハありとても義男子の義味の食なも受ざるべき
ふ。ふ友ふを対ハ送らんと。近経と残りく卿の。黄金をめく人知ざと嘆り
ゟらんとあらゟふ事齟齬して一家離散。僅ふ十ふが一をめく恩ハ

報ハーあし如ホ。不図も古屋母子来許ホ召喚せべこと公布田に妻しめ。
昔の恩を報ハーぬ。我ら。今日叶如ホ孤ありく兄弟子還舎妹ーこそふ甲斐
もありくか初ホ至るる。さこそ乞卦号ふらめ。皆悉死生〈渾命あり。心ぞ休む
とるうと足下が志実も憐ぶるとべい妹や姪を子こんごと君よう頼けるる。
ものと告まいらせざとーく放ち患ろべ法制ことうる号ホ彼んへさくあに対ふ
旨あり。と俄ホ言結あらあらくあよ。阿古屋人丸よ。汝ホ君の市兎すくか
永福寺の北窮布ホ。ふりつる罷免ーがうーよりくく目今退放とそ再び世
比ホ至るべらざ。さて比佐女と又十奈と一対ホ叶ホ死とるる。汝き因縁
あるべけ。ハけまホ従葬をごー。足ホのる花俊汝く后寛女ホ小君〈告げ
まらくせんいろホ十三因縁あらべ再舎の時人ら紙筆んらく供地ちとぞ
退放とこホ十三感謝ーく。阿古屋母子と伴つちんとともとべ母子のものの。叶

あくの恩恵をかくく。有宝と縛枝ホ。
時躇べ有宝言語を正もらーく。退放をせ
ものとも彼ホを退立よと。下知ホ後ひ奴僕ども。三人のものを退立とハ三人ハ
一対ホ立あろう。源ホ恩を何叶恵ホ
べ有重下僕ホ下知とるく。又十奈比佐女ら屍を。永福寺に葬らー。俗様を
伴ひ還りけり。此下暫時休話説再説。我七名清景達〈戸。平次が旅宿りに。
十三又十奈ホ再會ーく后別とるくらー。公家武家の往来絶間なく。あべ旅路
しくま去さーく東海道ハ京阪舎より。公
ホ役あーく。道をかくく東山道より。恐びくホ下りける。往く信濃国馬石駅
峠ホ経るこぬ名ホーく負ひる木曽路あくく。上りてハ下ら下りくハ又上り行
地方あく。世ホより渕てホ深山に入りぬ。生る岩入山のその辺ける。

月の影をみづからさとよこゑけんとも宜あらず。素清け地ホ瞳にあつし日既に暮
ホりぬと宿借ものうらしうへ今夜ハ野宿せよやとやみホ風宝く天星うる
くあ集僕とをとホ。せめくへあるとに方を徘徊く雲く
仁只有木立の其下ホ柱曲を軒傾き〳〵。盃海裏き古社あり。こゝ究竟の
処ぞと祝ホ入くこゑ公ゑゑ家根ハ腐りく月星を視よりく殺に又雷ある
ホ。床ハ板と要くく小雀蒲生ひ出より。蜘の網徐ゆホして奈何ある神と等を
とめさうホこゑ死知とあり。内陣の方のこそホ〳〵ゑ根ホ換祢さゑへ。
き家ホ座ともめく。暫時休ひ居てうら〳〵旅の労ゑホ泰ホもあらを自眠む
折うら足音さゑへ愕然とう〳〵目を醒し。静ホとゑ」を空起よに大き女うある
漢子の何やらんあホ携くく。華表の下に歩こ寄慌忙く土を穿「携へ」
ものを埋おき急に山ホを走去ぬ。素清始終と窺ひえん程ホおつみ。日今

そゑホ来つる。ものハ必定山賊ぬくそあらん彼強人のものを奪ひ叶ホに隠し
おき。再ひおと奪んとく我ハうるものあらん恐き山賊の挙動る今盗こ来り
しもの公。素又客ホこゑ公奪ひ彼奴ホ息と明さもんと社壇をFりく園
後を捜くく衝ぬくホ。華表の下に迫分く。今ハ何とこれ如
こゑに尚息ぶんを張ぬく探うえるホ。男子の首ホくありけをべ。
不審くて。そ俟拾んとそすりしう熟くく思ホ盗賊るらハ財宝とこそ奪ふ、
へきこ。爾あらざ〳〵く如我ハ人の首と拾来よう。叶ホホ拉て慌忙く驅ちう
しホハ縁あそあらん。彼奴ら不行怪〳〵けをべまつ叶首を差〳〵く彼再び
社ホ来るで否試んと摺殺又故の社壇ホ入くく彼首級と膝の下にひき
敷く今や来ると待居ぬそもく叶地方とのホハ馬籠峠より北又下も
山ホの方ホ入ぬるハ巌石岨老樹生茂り。白昼をも尚小闇く魅狼の巣穴

多く人を害ぬと多うなふ。ふみ推夫山猪などのるるのみ人跡なき深き切地方とも知らで宿りをこふ人と。牡丹ふまぐ伸吟来らーるり。彩ろくまぐ
ほさるるーろ。丑満にもやるーんざる比再び叫ぶ来るものあり。船法暗夜の
るるをび雑人るること知るるる。景清んふ這奴こそ。最前来つる漢ならめ。
今何ぢをろ做もうんと息を後めくも救び居彼曲者ハ人ありとも。知ぐぐく
静て歩こまる。華表の下と庇ちふくこハ不審と吟ながらも不通と捜索
つ。社壇の裏ちまぐい尋ね来る。景清と探りあてこそ人るりと云つも。他
を奪る体ありーぐ再び景清を按摩。首級ふるる鄙
けるハ言をも云ふぜ奪ひ去立ちんときまる処と。景清もまるさりと揚ざ脱
のぶ
を舒ーく被ととろんもちぶとさるハ彼者い捨んとうそ、引合ーぶ。あまりに
強く引やふ被断く双方へ互ふどうと
るびーぶ黒夜ハあやるー恐のそ。

景清外傳 松の操後編巻之四 終

景清多ふ労さと主ハ何方にちりふけん。牡丹
ふ首級と携へ来るものハ何者のハ人ぞ。そを下回ふ分解を読まるるー。